



日本のこころ

高野山真言宗前管長

松長 有慶 (まつなが ゆうけい)

高野山からやってきました松長有慶と申します。3週間前までは高野山の管長をやっておりまして、8年間2期務めさせていただきまして、やっとフリーになったわけです。管長の在任中からこの会場で話すようにとご下命を受けていまして、キリキリ舞いしながらやっとこの日になりました。歳が80歳も後半になってきましたが、体の方も何とか動いております。頭の方はさてどうかわかりませんが、80歳になって歯が20本とよくいわれますが、20本もないので、80歳後半になると10本くらいでいいかなと。歯の方もいうことを聞いてくれないので、ガタガタになっております。お聴き苦しい点があるかもしれませんが、「歯なしに話をしろ」ということで、そのうち耳に馴染んでくるかと思えます。そんなことで、こうした大きな会場で日頃重要な仕事についている方々の前でお話をしると、大変なことになったなと思っています。30年くらい前、高松でロータリークラブの年次大会があった時、学長をやっておりましたので、来て話をしろと高松に行って話をさせていただき、その時の記念品の革製のペン差しを今も使っています。貴重な記念品だと思っています。

私自身、管長になる前はお坊さんたちの師弟教育を大学でやっておりまして、私の専門はインドとかチベットが学問領域です。インド、チベットには再々行きまして現地調査をしたわけです。その頃は今の若い人のように外国に行ける時代ではないんですね。日本の円が弱くて、研究のために外国に行くといっても500ドルくらいしか替えられない。1ドル360円です。一直線にインドとかチベットに飛ぶわけではなく、羽田を出ましたあと、台北か香港に行って給油して飛び立って、バンコックで給油してインドに入る。香港とかシンガポールは自由市場がありまして、日本から円を持っていくと飛行場でヤミでドルに替えてくれる。ヤミで1ドルが400円か410円しました。その時分にインドにやっと行けたという、40歳過ぎてから。今の若い人たちがどんどん行けるのは羨ましいことです。インドにしばらく暮らしていましてインドをいろいろ歩いてきました。今年もまたこの歳になって年末年始にかけてインドに行ってこようと思っています。

インドは懐かしいところです。お金では苦労しましたが、わりあい今のようには民族紛争とか国同士の争いがなかったものですから、わりに行きたいところに行けたんですね。パーミアンの大仏も見えたり、カンボジアの内戦が起こる前で、アンコールワットも内戦前の平和な時に行っています。カイバル峠も現地のバスで通ってきました。そんな経験を積んでいます。最初に行ったのが1970年か71年でした。1970年は万博が開かれた年です。EXPO70というと大阪、大阪とよく知っていました。万博のパビリオンに月の石を見に行ったり、ヨーロッパやアメリカの科学技術の文明の恩恵が我々に紹介された時代でした。我々はまだヨーロッパやアメリカに憧れていて、外国に行くのもパスポートは一回限りで、終わったらポイドと判子を押されて使えない。封じられた時はびっくりして。そんな時代ですが、今ではどんな体験を積んでもいけない秘境まで、今は民族紛争が起こっているパキスタンの奥地の方まで行ってきて、スワットという桃源郷のような素晴らしいところまで。そこはなぜ行ったか？高野山と関係ある密教の発祥の地の一つで、そこに行きたいと。その時にびっくりしたんですね、日本では万博の年、日本は東洋の国でも西洋文明に追いつき、科学技術がずば抜けて強い、これからの未来は開かれているという前途の明るい時代だったと思うんですね、日本は。ところがインドに行くのと貧しくて、汚くて、この国は50年たっても日本のようにはならんだろうと。1970年に行った時はそう思ったわけです。道路もガタガタ、車はインドの国産車でアンバサダーというひどい車しかなかった。日本車が走っている時代ではない、そういう時代でした。ところがインドに行ってみると、たくさんのヨーロッパやアメリカの若者がたむろして来ている。一体なんだろうと。我々が万博のパビリオンを観て、目を輝かしてヨーロッパやアメリカは素晴らしいな、こんな国に日本も追いつこうという時代に、貧しくて汚いインドにどうしてアメリカ人やヨーロッパの若者が来ているんだろう。汚いガンジス河のベラレスでヒンズー教徒と同じように水浴びをしている。ヒマラヤの奥のチベット系のお寺にいったら若者が野球のキャッチャーのプロクターのようなものをつけて朝から晩まで仏に礼拝している。百礼をやっている。

おかしいなと。男だけではなく女房、子供までつれてきている。ヨーロッパとインドは陸続きだと。オンボロの車でも陸続きだと来られますから。なぜこういうことをやっているのか、なぜヒマラヤの山奥の貧しいチベットの奥に行くと、食べるものもおいしくない、そんなものを食べながらそういうことをやっている。「我々の文明がどうも病んでいるんだ。どうもこのままではおかしい、これからはアジアだ。こういうところに我々の未来を見つけ出している」という若者たちがいて、ヒッピーですね、私にとっては一生一代のカルチャーショックですわ。日本におって追いつけ追い越せと考えていた時代に、汚い国に、50年たっても日本のようになるかならない劣った国に「後進国」とか「先進国」とか今は使いませんが、「後進国」の最たるものの国に憧れて、なぜ若い連中が来ているのか。「今までやっていたことではだめだ、このままではいかん」ということを肌身で感じている連中。もちろん当時、ベトナム戦争がありましたからアメリカ人は徴兵拒否で行っていた連中もいたでしょう、戦争に行きたくないという連中もいたと。インドに逃げてきたという。しかしヨーロッパの人はそんなことはありません。

私は考えたわけです、なぜだろうと。回答が見つからないんです。日本における常識と彼らのものの考え方の違い。彼らは豊かな国の豊かな生活をしながら現状に不満をもっている、何か新しいものをつくり出さないといけないという意図があった。日本人のヒッピーも何人かおりましたが、圧倒的にヨーロッパ人やアメリカ人が多かった。考えさせられました。最初のカルチャーショックだった。これじゃいけない、今までのやり方、私たちが目標にしているものが必ずしも目標ではないのではないかという気がして。それから1年ほどインドにいました。一度外国に出たら一生出ることはないだろうと思って、私学連盟から100万円ほど留学費でもらって、それで世界一周の航空券を先を買った。一回しか出られないからヨーロッパからアメリカから全部回ってきてやれという気持ちでインドをあちこち回って中近東からヨーロッパを回ってアメリカを回って一周して回った飛行機代が70万円かかりました。100万円もらって70万円が飛行機代、残るのは30万円しかない。それで1年ほど暮らす、1ドル400円の時代ですからね。そういう時代に私にとっては大きな経験をしたのは、そんな連中と話ができたことですね。「違うぞ、時代が変わるかもしれない」と。

帰ってきて1980年代はまだ日本では浮かれていましたよね。90年代になってくると、日本の社会をこのまま科学技術全部に任せきりにしていたらとんでもないことになるぞと一般の世論として出てきた。もう今になると常識です。このままいいたら大変なことになる。その当時は民族紛争はなかったけど、その他の事情は今、直面している現代的な問題が、その当時からいわれてきたと思うんですよ。人間の格差の問題、貧富の問題、医療の問題、ものすごく大きいのは環境問題、このままいいたら人類はどうなるか。日本ウナギとかマグロが絶滅危惧種になっているから捕るのをやめようと。ウナギも食べられなくなる、マグロも食べられなくなるから保護しようと。マグロとかクジラとかウナギより前に人類の方が危なくなるのではないかという警告が。このままいって一酸化炭素を出し、汚水を流していると人類の方が先に絶滅危惧種になるのではないかという時代になっていることは共通認識になってきている。どうしようか、具体的な策はない。これからどんどん金儲けして豊かにして行って、というふうになれたらいいんですけど、昔のように働いたら働いただけ高度成長していけばいいですけど、そうじゃない。経済だってどうしたらいいかわからない。社会も環境問題も医療の問題もそうですね。あの時分にわからなかったエボラ出血熱とかエイズとかは、アフリカの山奥のコウモリかがもっていた病気です。コウモリのテリトリーであった場所に人類が木を伐って生産を伸ばしていった。棲む場所がなくなって寄生していた細菌が人間に移りだした。手をつけられなくなっている。このまま続けていいたら一体どうなるんだろう、とより危機的状態に今なっている。1970年のインドに来たヒッピーたちが言っていたことが正しかったという、この貧しい生活の中にこそ未来をみていかないといけないんだという連中の話は、単なるヒッピーたちが徴兵逃れでやってきたのではない、大変な時代になってきている。あれから50年近くたっていますけど、それでいて解決策がない。その上、70年代にアジアの国々の隅々まで行けた時代ではなくなっている。ちょっと行ったら民族紛争で命の保証がない。治安なんてものは警察だけではなく軍隊もわからんという、イラン、イラクとかアフガニスタンとかパキスタンの奥地に行けませんよ。そういう時になって、どうしたらいいか。

2期8年間、高野山の管長をしまして、仏教の大きな集団ですから回りもちで全日本仏教会会長も2年間引き受けたわけです。4年前に全日本仏教会の会長をしていた時、ダボス会議から招待状が来ました。ダボス会議は経済界とか政治のトップレベルが世界の動きを議論したり会議したりする。世界の経済や政治のトップが寄って冬のスイスの寒いところで会議をしても何か問題が喉元にひっかかる時代になってきた。宗教の問題に今まで関心も持たなかった人たちが宗教の代表者にも意見を聞いてみようという時代になってきた。西洋のトップレベルの人た

ちが主ですから宗教というとカソリックかプロテスタント、ユダヤ教の人々がサジェッションを与えていた。ユダヤ教やキリスト教だけではどうにもならない、この頃はイスラムも。一神教の話だけを聞いていたのではどうにもならない。東洋の宗教の話も聞こうじゃないかと。東洋宗教なら仏教、日本の仏教界の総元締めである全日本仏教会に話をしてくれと招聘状がきた。今までも来ていたようですが、今までの会長はパスしたのかもしれませんが、私はおっちょこちょいですから「よし、行こう。行って世界の連中に東洋人のものの考え方を、東洋文化についての話を聞いてもらおう。」と思いまして「はい」と手を上げて行くわけですが、ペーパーを出さないといけない。こういう趣旨でこういう講演をしますと。そういう準備もしまして、4年前に初めて仏教徒としてダボス会議に招聘されたのは、ちょうど鳩山内閣ができた頃でした。民主党政権ができた時で、宗教部会でお話をしました。いろんな人とお会いして。英語で書いたペーパーも読んでくれていたと思います。

日本部会も開かれている。日本セッションがある。鳩山さんが首相として来るはずが、国会が忙しくて、1月末ですで行けないと。キャンセルして鳩山さんの代わりにお前が出ると。私が首相代理で、経済の話をせずに「日本文化」の話をしてきたんです。かなり反響がありました、東洋の話は。聞いてないですから。一神教の世界の中でのものを考えて、これが絶対だと。アメリカ人、ヨーロッパ人の悪いところは、自分たちが信じているのは絶対だと思こんでいますからね。あとは野蛮国だと思っている。あいつらの文化なんてたいしたことないと思うところに、東洋の文化についての話をしたら、後の質問がすごかったです。後の質問だけでは処理できない問題があったものですから。外国人は見当はずれの質問もします。私の話に刺激を受けて、私が1970年、インドに行ってカルチャーショックを受けたように、私の話にカルチャーショックを受けたのは日本の商社のアメリカ支社長です。どこの会社か言いませんけどね、「こういう話を日本の時に聞いておきたかった。アメリカにいてアメリカの会社でトップになってアメリカ人を使いながら、こういう話を聞いておけば自分のアイデンティティができたのに。」と。ある商社のニューヨーク支店長、日本語でしゃべりますから楽でした。ということは日本のトップレベルの方々の中には案外、東洋のものの考え方がないんだということなんですね。ヨーロッパやアメリカ文化については詳しく教育を受けているけれども、日本人のものの考え方が外国にどんなに価値があるかということについての話は、受けてないんですね。どうい話をしたらいいかわからない。アメリカ人を使いながらトップとしてどういうふうに使ったらいいか。ノウハウは勉強している。自分の中にどういうものを持ってないといけないかという教育を受けてない。戦後教育は、まさにそうだった。我々が1970年にヨーロッパ、アメリカの文化に憧れたように、これからは科学技術が万能で、すべてこれに任しておけば、という。日本のものは古くさい、皆、捨てろという時代。私の旧制中学校1〜4年生は太平洋戦争の最中、戦争が始まったのは小学校6年生の12月です。終戦は旧制中学の4年生の時です。工場に動員されて、製鉄工場の溶鉱炉で中学校の4年生まで。完全に労働基準法違反で24時間勤務です。溶鉱炉の火を絶やすわけにいけませんから3交代でね。厳しい時代だったんです。戦争に負けた。これからはアメリカの時代だと。同級生も優秀なのはアメリカに行きました。私は劣等生だから日本に残りましたが。

私は日本のこと、インドのこと、東洋のことを勉強していたから、今、そういうことを知っている人がいないからと聞くわけですよ。東洋の文化の中で我々が持っていなければいけないもの、西洋の文化に無いもの、これから東洋の文化から発信しないとイケないものは、いくつかあると思う。まず一つは「生き物のつながり」。今まで個が大事だ、自我が大事だと民主主義の教育の根幹にあった「自我の確立」を徹底してきた。自我の確立、自分を中心にして世界をみる。科学技術はそうです。しかし確立した自我同士がぶつかりあって揉めている。しょうもない事態が起こっている。西欧の文化がだめだから東洋がいいというわけではない。「日本の心」といっても、すべてが日本のものに代替するというのではなく、今までのような画一的な生き方、民主主義の一つの政治形態の中にありながら今まで無造作に捨ててきた日本的なものの考え方の、いいところをもういっぺん見直してみようじゃないかということなんです。エイエイヤッと軍国主義が復刻するという意図ではない。日本文化が戦後、惜しげもなく捨ててきた、無視してきた、バカにしてきた、そういうものの中にいいものがあると。日本人で外国で働くエリートたち、トップレベルのエリートたち、日本の一流商社のニューヨークの支店長をやるような人、エリートの最たる人たちが「ああっ」と言う。個というものが絶対の意味をもつ。ところが日本の文化はそうじゃないですよ。お互いの相手の立場と一緒にあって、相手と自分が同じようなものの考え方をもっていくという形もできる。

言葉は文化の伝統の中で信念のようにになっている部分が多いと思う。戦争中、中学にいて初めて英語を習ったんですが、大文字・小文字があるとか、英語は最初に大文字を書かないといけない。ところが途中も大文字を書か

ないといけない。一人称単数の「I」、神様の「God」。日本の神様は八百万でどこにも神様がおるけど、西洋人にとって神様は絶対的な存在ですから大文字で書く。一人称単数を大文字で。英語圏の文化はそうだと。これは絶対的な自分の存在を中心に世界をみていく。言葉は面白いですね。民族性、文化が映し出されている。外国語で日本語は一つだけ、外国語ではたくさんある言葉。外国語では一つだけ日本語に訳すとたくさんのもがある言葉、たくさん訳語があるのはその国の文化がそこに意識があるということだと思う。雨はレインで一つだとしても日本では春雨・時雨とか。魚も出世魚は名前が変わる。日本人がそういう文化を持っていた。アラブの人たちは羊にはオス・メスがあり、小さい羊とか、いろんな形で羊の言葉があるそうです。言葉のポキャブラリーがあるということは、その民族がそれに関心があるということだと。日本語で外国語より多くのポキャブラリーがあるのは何だと思われませんか。日本人がそこに関心があるということです。一人称単数と二人称単数です。「俺」「わし」「我が輩」、いろんな言い方がある。二人称も「あなた」「お前」「貴様」「野郎」とか。英語やドイツ語に直してもそんなにたくさんは無い。これは日本人が人間関係を重視していた。相手の立場によって自分の一人称単数の言葉を使い分ける。相手のあなた、お前、社長、言い回しがたくさんある。結婚した時に「お前」と言うと叱られたんですよ。「私にお前と言わないでください」。難しいなと思ってね。日本人の特徴が、そういうところに自分と相手、隣の人とのつながり、生き物としてのつながりを大事にしている。それを悪くいえば「場を読む」とか「空気を読む」とか、日本人がバカにしてきた言葉ですけど、それが絶対正しいというのではなく、今のように「俺が、俺が」で通る時代では、そういう文化だっでどこかで採り入れていくべきではないか。相手と自分が同じ空気を吸っている。考えは違ってもいいけど、一つの大きな仲間ではないかという意識があるわけですよ。我々は「平等」という民主主義の原則で教育されてきましたけど、結果として皆が平等なのか、それぞれの人の持ち味は平等ではないですね。ところが「平等だ」としておけば簡単ですからね。

そこでお話をしたいのは、一つは「命がつながっているという思想をもう一度見直そうじゃないか」。人間だけが偉いのではない、動物、植物も同じ命をもってこの世に生み出されてきた。人間も、どこの民族が素晴らしいのではなく、それぞれの特徴を持ち合って人間が生きてきているんだという考え方は、東洋のものの考え方ですよ。

インドに行ってから味をしめてヒマラヤの山奥にポーターやシェルパを雇って学術調査に行った経験があるんですけど、荷物を背負わせたり、料理を作って、シェルパやポーターと一緒にヒマラヤの山奥を歩き回って帰ってきましたら、「日本人と一緒に旅行できてよかった」と。なぜか？西洋人に使われると、お金を払うと契約関係でそれだけだと。日本人とは「おい、嫁さんどうや、子ども何人おるんや？」とか聞いてくれる。いろんな話をしているうちに日本人のものの考え方もわかってくる、いい勉強になる。西洋人は契約関係だからお金だけをもらって仕事をするだけだと。シェルパがそういう話をしていました。これもある意味では仕事を金を払って済むじゃないかということではなく、何日も山歩きをしていると人間関係ができてきたということだろうと思うんですね。人間同士の付き合いはそういう面もあるわけですね。他人のことを思いながら自分の仕事を、目的を納得させながらスムーズに、争いを起こさずにやっていけるか。そういうつながりの思想が東洋の文化の中にある。

「輪廻」というと昔は古くさいといったけど、しかし日本人のどこかに残っています。小さい時にご飯食べて横になると「牛になるぞ」と言われたり、遊びほうけてなかなか家に帰ってこないと「来世はお前、カラスかコウモリになるぞ」と言われたり。人間だけが絶対ではなく、やがてそういうものとぐるぐる輪廻転生していくという考え方があったわけですよ。それが生き物の共通認識だった。人間だけではなく動物も植物も人間のために作られたのだから、人間のために使ったらいいという思想ではない考え方。確かに環境問題はそうだと思います。人間だけの欲望のために動物、植物を金さえあれば使ったらいいということをしていると、とんでもないところの木を伐採したり、フィリピンやボルネオの木を伐採したり、アフリカの木を伐ってきて、その仕返しはエボラ出血熱という形で病気が起こってくる。私たちの命というものは世界中の植物、動物の命とつながっている。それを犯すことによって人間にも被害が出てくる。命は人間の命だけではなく、動物、植物の命もどこか頭に入れて、ものを考えていかないといけない時代になっている。そういうことがあまり注意されず、自我の確立、俺が一番偉いんだ、主体性を確立せよということで教育されてくると、仕事はうまく進むが、相手をかまわずにどんどんやっていけばいいですが、それでなれるか、なれないかということは、これから軌道修正が、ある意味で行わないといけない。日本人の中に、もともとそういうものをもっていたわけですから。相手に対する思いやり、自分が生まれかわったら動物か植物になるかもしれないという、そこにいるブタや犬、鳥は自分のお父さんやお母さんの生まれ代わりかもしれないというような、迷信とか、ばかげた考えだと言ったんではだめだと。亡くなったおじいさん、おばあさ

んがここに鳥になって帰ってきているとか、それが共通認識だろうと。生き物としての命という問題が全部つながっているんだという、ものの考え方を東洋人はもっていた。「輪廻転生」の考え方でやってきたんですね。40歳すぎてインドにいったから再三、インドやチベット、ネパールの山奥に行きました。そういう国々の人と親近感をもった付き合いをするようになりました。アジアの国々のものの考え方は少しはわかったような気がします。中国だけはわかりせん。あまり行っていませんから。

東洋の文化で二つ目に世界的に発信できるのは「多元的な価値観」を持っていること。東洋人は、一元的な価値観だけで突き進んできたのではない。あちこちに価値をみるという文化を持っている。しかしこれは科学技術や経済にはふさわしくありません。多元的な価値観は、一元的な価値観で目標に向かって一目散にすべてのものを捨てさせても、目的のために駆け上っていく。いかに早く、いかに効率的に、いかに遠いところに行き着くか、そういうのが謳歌された。今もそうです。グローバル化は一つの目標に向かって統一して早く馴染んでいく。これからいつまで続くかわかりません。しかしこれではどうにもならない時代にきていることも確かですよ。

そうするとここで「価値観の多様性」と言葉としてはいいんです。しかし扱いにくいですね。多様性がある。ものの考え方が違う人と統一して突っ走るなんてのは、なかなかやりにくいことは確かですよ。そういうところには、多元的な価値観より一元的な価値観の方がやりやすいんですね。目標が一つ決まっていますから。それに向かって、突っ走れば、後のものはいかに犠牲にしてもかまいません。目標に向かっていくところで、それぞれの人の目は死んでもいいということですよ。多元的な価値観をうまく運用するには、自分の目がどうかということになってきます。それぞれのもっている目が、具体的な例を出してみます。40歳過ぎてからインドなどをふらついたものですから、何度もお坊さんや檀信徒の人を連れてインドの旅行をしました。インドネシアに行って仏跡を回ったり、なんべんも旅行した経験があるんですが、そういう人たちと一緒に旅行すると皆、お土産を買に行きます。「疲れた」と言うんですね。自分が買ってきても同室の人に「あんた幾らで買ったの?」「私、10ドルで買った」「私は5ドルに負けさせた」「しまった」と。とにかく値切らないと損という。アジアの国では値切り勝ちということで疲れると、値段競争で。自分より安く買うとコンチキショウと競争意識が出てくる。インドの旅行はいいけど、土産もん買うのに疲れるな。日本はいいな。なぜか。日本は定価販売だから。どこにいても同じだと。日本はよいと。定価販売だと。それが落とし穴なんですよ。インド人は自分が買いたいと思うと、その値段までいって、そこで向こうもだめだと思ったらやめますしね。自分の目で判断してその価値を見つけて適当な値段で買う。日本人は自分の目ではなく、人がつけた値が高ければよいものとか、安ければ悪いという安心感がある。自分の目が働いていない。ものよいものを見分ける、多元的な価値観が始まってくると、一番問題になるのは自分の目だということになってきます。それがあかないか。一元的な価値観の方が楽ですよ。ところが、ワーツといくためには余分なものは全部そぎ落とさないといけない。効率的なものだけ残して一目散に駆け抜けるのが今までの経済や政治のやり方であったんですけども、いろんなところでトラブルが起こってくる。みんな一元的な価値観が絶対だと思っておられないと思うんですよ。アメリカの真似しないとしゃあない、悔しいけど、ということですよ。だけでも多元的な価値観、日本人はそういう目をもっていたと思うんです。ものの真贋とか人の特徴を見分けながら全体としてどういう使い方をしていくか。戦後は価値の目標が一つに決まってそこに集中してしまい、そういう癖がついて見方がおそろしくなっている。人間の見分け方も、もの見分け方もそうだと思います。

真言密教、えらい修行を積んだお坊さんのお祈りを聴くんだという、まか不思議な教えだと思いにしているかもしれません。そうじゃないんです。秘密の仏教。秘密という言葉はどういう意味か。弘法大師が書物に書いています。秘密には2種ある。一つは「如来の秘密」だと。一つは「衆生の秘密」がある。如来の秘密は仏さんの秘密。衆生の秘密は人間の方の秘密なんです。秘密というと、自分だけが企業の秘密とか抱えこんで自分だけが得するとか、修行を積んだ人がこれは教えられないから秘密にしておくとか、知られたら損するとか、日本語の常識としてはそうなんです。弘法大師はそうじゃないと。これは深いと思いますよ、意味が。なぜか。如来の秘密、仏さまの秘密がある。仏さま、ケチだな。お賽銭少ないから教えてくれないのかな。どのくらいお布施を出したら仏さん教えてくれるのかな。そうじゃないんですね。如来の秘密は仏さまが惜しくて隠しているのではない。教える方の力が、そこまで行ってないから相手の立場を思って秘密にしているという。具体的な例で運動競技が盛んですよ。オリンピックだけではなくアジア大会とかスケートも柔道も体操だったり、しょっちゅうテレビを賑わしておりますけど、我々があんな演技をやったらいっぺんに怪我してしまう。高度な演技をスケートだったら4回転半ジャンプなんてとてできない。氷の上を滑るのがやっとなのに、尻もちばかりついてできない。あれだけになるには、

コーチがついて基礎から教えて、少しずつノウハウを教えている。素人に教えたら大怪我をするから教えないという秘密がある。相手の能力がここまできたからこれを教えるという秘密がある。ケチで隠しているのではなく、相手の立場と能力を見極めながら秘密を解きあかしていくから能力が伸びていく。こういう秘密がある、仏さんの秘密には。これも普通の秘密の意味と違うでしょう。自分の目がどうか、コーチの目がある。

もう一つは「衆生の秘密」。我々の方の秘密。誰も隠そうと思っていない。誰もケチをしようと思っていない。あんたが隠しているという秘密なんです。如来の秘密はコーチがもっている秘密だと理解していただいて、衆生の秘密、我々自身が勝手に秘密にしていることがある。なかなか難しい。弘法大師はこういう例を出している。「医王の目には道に触れてみな葉なり」「解宝の人は鉱石を宝と見る」。こういう言葉がある。これなんですよ。医学・薬学の心得のある人が、道を歩いて、今はコンクリートになっていますが昔のように野道を行けば、昔の野道を考えてください、そこに草が生えている、土の道には。草を見ても雑草だと思って踏みしめてしまう。しかし医王の目、医学・薬学の心得のある人は、道に触れてみな葉なり。道を歩いて草を見たら、これは腹痛の薬になるとか、これは頭痛に効く薬が採れるとわかる。雑草か薬草かは草のせいではなく、見る人の目が違う。見分ける目を持っているかどうかによって、ものの値打ちが変わってくる。目がある人が見たら雑草でも薬草に変わる。解宝、宝石の目利きのある人が見ると、石を見ても、これからどういう宝石が出てくるかわかる。こういうことですよ。これはまさに多元的な価値観のギリギリだと弘法大師は言っている。弘法大師のお考えは、決して一元的な価値観ではない、すべてのものに価値があるんだという立場が、弘法大師の哲学の基本にある。これは東洋人の考え方の中にある。

ものの中の価値は、そのものが絶対に持っているものではなく、見る人の目によって価値が違ってくる。人間を使う時もそうですね。こいつはこの仕事だけやらせると、一元的に能力を使っていると、能率が上がらない。この人はこういう能力をもつ、リーダーになる人がどういう能力を見る目を持っているかということになるわけですよ。これは東洋人の、悪いところは捨てて、いいところを見ていきましょうという思想・文化・哲学をもっている東洋的なものの考え方。高度成長の時は、そういうものは邪魔になったんですよ。いいところばかりだと追いつかない。隣のやつに負けてしまう。こんなことは早く捨てないといけない。よく言われましたな。何十年前は「日本人はなんだろう。年末になるとクリスマス、お正月になると神社に柏手を打って、お盆やお彼岸には墓参りに行って、日本人はだらしがない、こんなことをしていると追いつかない」と言われたわけですけど、日本人は多元的な価値観を知っていますから、同じ家に神棚と仏壇を祀っている。日本人はだらしがないと、そうじゃない。ちゃんと神さまにお願いする時と仏さまにお願いする時とは違うんですよ。使い分けているんです。価値観を一元化しないとイケないと。そんなことをやっているとしたら今の世界のように民族紛争・宗教間の対立が起こる。自分が絶対だと思っているから相手の立場を認めない。多元的な価値観は相手の立場も信仰も認める。

2カ月前、伊勢で神道の環境問題の世界大会がありました。環境問題について発言していたので基調講演してくれと。彬子女王殿下も基調講演を神道の立場からお話をされて、私と二人で。神道に関係する世界の人たちが関心をもつ大会の紀要が本になっています。「仏教の人の話も神道と近いんだ」という話が出て、それはあたりまえで、日本人だから。宗教間に対立すると思っているわけですよ。私が管長の時、天台の座主さんを招待して話をした。本山の応接室に入りきれんくらいテレビと新聞社がやってきた。何事かと思うと「最澄と空海は生涯ライバルで仲が悪く思っていたら、なんじゃ、手を握った。これは日本のニュースだ」と。私は、そう考えてない。一般の人は宗教が違うと敵対意識をもっていると。「あんたの話は神道の話と同じや」ということになってくるわけです。そういうメンタリティは、日本人は昔から持っていたんですよ。それは何か?よいものはよいという自分の目を鍛えましょうということから出発している。人が決めた価値・目標を絶対視して、「そこにいきましょう」ではない、日本人の生き方は。自分の目を見て、よいものを生かしていこう。まさに多元的な価値観の極致は日本文化の中にある。

曼陀羅というのがありますね。仏さんがいっぱい集まっておられるような絵。あれはね、寄せ集めなんですよ。種を明かせば。一番偉いのは真ん中の大日如来だけなんです。絶対なんです。周りのたくさんさんの菩薩とか餓鬼・畜生まで全部入っています。インド人の庶民が信仰した仏さまを全部採り入れているんです。ヒンズー教の仏さんもバラモン教の仏さんも全部採り入れている。異教徒だからと戦争したり、相手をはね除けたりということは絶対ない。皆、ああ、いらっしゃいと自分の中に入れてしまう。そうして、こういうところが優しいといって信仰されている神様はこっちに入れましょう。観音さん・仏さん・勇ましいという仏さんはこっちに、頭がいいと云われる仏さんはこっちに、情け深いといわれる仏さんはこっちに入れましょうと分類して入れてある。ということは100%完全なものはどこにもない。偉い仏さんが集まっているかと思うけど、あれは欠陥商品の集まりやと。欠陥商品の

集まりだから人気があるんですよ。100%完全なのは真ん中の大日如来くらい、真言宗のお寺では大日如来を祀っているお寺はあまりないんですよ。信仰が完璧すぎるとだめ。お不動さんとか観音さんとか地藏さんとか欠陥商品の方が信仰が厚い。ということは個性があるということです。個性をうまく配置して99%が欠陥でも、全部、どこかに取り柄があるから入ってきている。1%の取り柄を集めてきて全体で完全なものをつくりだせばよい。それが曼陀羅なんです。欠陥商品を寄せ集めてもユニバーサルな個性ができる。これが西洋的なものと違う。西洋では、カオスを徹底的に痛めつけて排除してコスモスをつくる。そういう西洋のものの考え方、汚いものは全部排除することによって、きれいなものだけで聖なるものをつくりだそうと。東洋の考え方はそうではない。汚いものの中にも聖なるものがある。自分の目を信じよう。だから70年代に汚いガンジス河に水浴びする若者がたくさんいた。自分で価値観を持っている。ヨーロッパの豊かな価値観の中で育ちながら、それに満足せず、もっと違う価値観を自分の目で見ようとアジアの国を放浪している。日本人もそういうところがあったはずなんです、そういう目が。戦後教育の中で、一元的な価値観に右へ倣えさせられて、古いものは捨てましょう、汚いものをもっていたら近代化できませんよ、負けますよと捨ててきた。よいものを見つけ出して自分の一つのコスモスを創りだすという考え方。これは東洋の文化の中にはあったんですよ。

多面的な価値観の、もっと具体的な例。チェスと将棋の違い、8つの目が9つの目かは違いますし、両方とも王様の取りっこをする。チェスと将棋と基本的に違うところがある。チェスは相手の駒を取っても使い道がない。ところが将棋は相手の駒を自分のものに使える。飛車を取ってきたから桂馬しか使えないということではなく、飛車は飛車の持ち味を自分のものに使える。相手のものであっても。西洋のチェスは相手のものは全部敵方、盤から払い落として使えない。直に対戦する。東洋のものは、相手のものであっても持ち味を自分のものとして使える。こういう文化をもっているわけですね。どうしてこういうものを捨ててきたんでしょうね、日本の教育の中で。

私も80歳後半になって、四捨五入したら90歳ですよ。仏教の中にも、東洋の思想の中にも、すばらしい、これから生きていく核心があるんですよということをね、みなさん方は戦前の教育もちょっとご存じの方もいるかと思いますが、戦後教育はこういうことをしてこれなかった。だから世界に対して日本からの文化を発信することができない。グローバリゼーションに巻き込まれてしまうのが関の山になってくるわけですね。日本のものを発信すると、ヘイトスピーチになる。そうじゃなくて、もっと自分の持っているものを見直そうじゃないかと。仏像を見るのも結構です。そんなに抹香臭いと頭からけなすのではなく、持っているもののすばらしさをもう一度見直して、自分たちの生き方の中に植えつけていく、そういうことが続いていくと日本から世界に対する発信ができるのではないかと、私は考えているわけなんです。

来年、弘法大師が高野山開山して1200年、1200年の歴史は重いですよ。1200年の歴史の中で我々が積み上げてきた文化がある。一元的に切り捨てるのではなく、ほんとは仏教の中にもこういう話があるんだという、東洋の文化の精粹が仏教の中にも表れているということです。四捨五入して90歳近いのが、これくらいしゃべると疲れちゃったので。あとは、ついこの間、岩波新書で『高野山』を出しました。1000円がおつりきますから、いっぺん読んでみてください。自分自身の生き方と関連させながら、なぜ今、高野山に外国人がたくさん来るのか、私なりの分析をしています。ダボスに行った時の私のペーパーも載っている本もありますが、外国に発信したのもありますけど、言い残したことがあったらそこからくみ取っていただけたら幸いです。

《経歴》

宗教学家。1929年（昭和4年）、和歌山県高野山生まれ。高野山大学密教学科卒、東北大学大学院文学研究科インド学仏教史学専攻博士課程修了、昭和52年文学博士（九州大学）。

昭和45年高野山大学教授、昭和58年高野山大学学長に就任されました。

高野山真言宗の大僧正で学匠、補陀洛院住職。宝寿院門主、高野山第503世寺務検校執行法印、平成18年高野山真言宗管長、高野山真言宗総本山金剛峯寺第412世座主、平成20年全日本仏教会会長、平成22年真言宗長者などを歴任されました。

専門は、密教学、密教史。著書に「密教の歴史」「密教」などがあります。